

骨<sup>ほね</sup>寺<sup>でら</sup>村は、千年の歴史を生き抜いてきた。一見するだけでは、東北の中山間地の小盆地に佇まいする何の変哲もない小村に過ぎない。けれども、このムラについては、中尊寺に残された中世の絵図・文書類のほか、現地に残された相当数の近世・近代の絵図・文書類に恵まれている。それによって、一〇世紀に入るあたりに稲作の小村が形成されてから、中尊寺経蔵別当の「再開発」になる中世「骨寺村」へ、そして仙台藩政下における近世「本<sup>ほん</sup>寺<sup>でら</sup>村」へ、近現代における巖<sup>い</sup>美<sup>び</sup>町本寺地区へ、さらには最近における一関市巖美町本寺地区へ、というムラの歴史が、すなわち千年にわたるムラの歴史のダイナミックそのものありさまが復元可能になっている。

このように稲作が開始されて以来、千年にわたるムラの歴史を復元することが可能なフィールドは、列島はおろか、アジア世界においてさえも、それほど多くはない。

その千年にわたるムラの歴史のなかでも、古代から中世への転換には、そのダイナミズムにおいて際立つものがあった。

すなわち、一〇世紀に入るあたりに形成された稲作の小村が、中尊寺経蔵別当による「再開発」によって、耕地・人口の倍増もたらされるのにあわせて、アジアから伝来した仏教に即応しながら、「この世の浄土」ともいうべき景観が生み出されて、在来の自然信仰によってかたちづくられる景観に重ねあわせられることになった。いいかえれば、仏教以前と仏教以後の文化的要素が重層的かつ複合的にブレンドされた特別の景観が形成されることになった。

その日本農村の原風景の形成とでもいうべきダイナミックな転換が、なんと、中尊寺に残された二枚の絵図によって、鮮明かつ臨場感にあふれる筆致によって、ものの見事に描きだされているのではないか。しかも、そのうえに、描き出された原風景のありさまが、いま現在におけるムラにおいても、失われることなく、しっかりと維持されているのではないか。奇跡的としか、言いようがない。

二〇〇五年、「骨寺村荘園遺跡」が国史跡に指定されることになった所以である。ならびに翌二〇〇六年、「一関本寺の農村景観」が国の重要文化的景観として選定されることになった所以でもある。あわせて、一九九五年、その二枚の絵図をはじめとする中尊寺の文書群が、国の重要文化財に指定されていることも、見逃しにはできない。

本書においては、その二枚の絵図に描かれた重層的かつ複合的な景観に立ち向かうことによって、古代から中世への転換のありさまを具体的に解明すべく、ありつたけの力を尽くしてみることにした。あわせて、骨寺村千年の歴史の勘所をつかんだうえで、近世・近代・現代にまで繋がる筋道を模索してみることにした。

これまでも、その二枚の絵図に取り組んだ研究はなきにしもあらず。けれども、仏教以前と仏教以後の要素が重層のかつ複合的にブレンドされた特別の景観の解明に繋がるような方向性にて、二枚の絵図に取り組んだ研究としては、大石直正・吉田敏弘氏による基本的かつ古典的な論文があるのみである。だが、その大事な方向性そのものが、大石・吉田その人によって撤回されるといふ憂き目にあつてもいる。こうなつてしまつては、自分なりに取り組むほかにない。それによつて、中世日本農村の原風景の復元をめざして行くほかにはない。

いま、歴史学会では、荘園絵図の研究や荘園の現地調査などは、あまりおこなわれていない。かつての盛況からすれば、嘘のような静けさである。

けれども、最近に及んで、海老澤衷編『中世荘園村落の環境歴史学―東大寺領美濃国大井荘の研究―』〔二〇一八〕ならびに大山喬平・三枝暁子編『古代・中世の地域社会―ムラの戸籍簿―の可能性―』〔二〇一八〕が公刊されて、様子が変わり始めた。あわせて、骨寺村の現地でも、大石直正・吉田敏弘両氏の基本的かつ古典的な論文に続く世代による『骨寺村荘園遺跡村落調査研究総括報告書』〔関市博物館二〇一七〕が公刊されている。

海老澤編、大山・三枝編。いずれも、「環境歴史学」「ムラの戸籍簿」など、タイトルからして、新たなる方向性を模索するものになっている。そのほか、「千年村」の研究潮流、日常性を重視する人類史的な方向性、伝統文化と信仰が様々に関わる、個と集団の媒介項、収取の単位×生活の単位、村と郷との時間的(通時的)かつ空間的(地域的)な動態、古代・中世における庶民生活の実態ほかの言葉によっても、その方向性が明らかである。骨寺村の現地における取り組みもまた、そのような方向性に響きあうものであった。

ほかにも、春田直紀編『中世地下文書の世界―史料論のフロンティア―』〔二〇一七〕や、荘園・村落史研究会編『中世村落と地域社会―荘園制と在地の論理―』〔二〇一八〕、似島雄一『中世の荘園経営と惣村』〔二〇一八〕、藪部寿樹『日本中世村落文書の研究―村落議定と署判―』〔二〇一八〕ほかの仕事が公刊されている。

それら海老澤・大山氏ほかの仕事について、あえて一言にしているならば、「通時的・学際的」な取り組みということになるであろうか。そのような手法であり、それを必然ならしめる視野の広がり。ということにもなるのかもしれない。

入間田は、中世の文献史学の徒に過ぎない。けれども、古代・近世・近代の文献史学はもとより、考古学・民俗学・地理学・農学・生態学(花粉・プラントオパール分析)ほかの成果に学ぶことによつて、「通時的・学際的」な研究方法に響きあうような取り組みを重ねてきた経過がなきにしもあらず。本書の取りまとめにさいしては、そのような経過を踏まえつつ、その方向性を嘯みしめなおすことによつて、骨寺千年の歴史の総体にアプローチすべく、ありつ

たけの力を尽くしてみることにしたい。ただし、本書において、その方向性に関わる取り組みが、どれほどの具体的な成果をあげることができているのか。その判断については、読者に委ねるしかない。

いま、日本の農村は、農耕を開始してムラという定住形態をかたちづくって以来、最大かつ最終ともいえるべき危機に瀕している。若者は出てゆき、中・高年世代の離農・離村が相次ぐなかで、ムラそのものが消滅しつつある。このままに推移するならば、もしかすると、数十年後には、ムラという定住形態そのものが珍しくなるのではあるまいか。

そのような危機に瀕するなかで、ここいら辺りで、ムラの歴史をふり返って、千年の歴史を生き抜いてきた持続力の、ないしは生命力のありかたに想いをいたすことが必要なのではあるまいか。そのことなくして、ムラという定住形態の将来を見定めることはできないのではあるまいか。

本書における基底の問題意識は、ここにあり。この問題意識が、本書における具体的な取り組みのうえで、どれほどに生かされているのか。これまた、読者の判断に委ねるしかない。

本書を編むにさいしては、既発表の論文を土台にしている。それらの論文を再録するにさいしては、その後の知見を増補する傍らで、錯誤を訂正・削除することがあった。注記のスタイルについても、統一にしたがっている。

ただし、既発表の論文のうち、「中尊寺領の村々の歴史的性情について」〔二〇〇二〕については、骨寺村の問題に自分なりに取り組んだ最初の論文ということもあつて、込み入った構成になり、錯誤も少なからず。したがって、そのままのかたちにては、再録に適わず。結局のところ、その内容を数分して、本書Ⅱ一〜四章において、独立の章として、さもなければ既発表の論文を土台とする章における増補分などとして、なんとか、なんとか、取り込むことがで

きた。不手際をお詫びする次第である。ごめんなさい。

また、本書Ⅰに再録した世界文化遺産ならびに国の重要文化的景観に関わる二論文については、純粋な意味における学術論文とは言いがたい。いずれも、それらの問題に関わる論点を解説しているだけである。すなわち、その論拠となる歴史的な事実においては、本書Ⅱ・Ⅲ・Ⅳと終章の各章における論証に依拠している。したがって、本来的には、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳと終章の各章を読んでいただいた後に、お読みいただくべきものである。

けれども、世界文化遺産ならびに国の重要文化的景観との関連において、いま、なぜに、「骨寺村莊園遺跡」なのか。という問題に取り組んだ二論文によつて、骨寺村千年の歴史のあらましについて、あらかじめ、一定のイメージをかたちづくっていただけではいか。そのような期待からして、あえて、それらの二論文を最初にならべさせていただいた次第である。そのような意味では、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・終章の各章における論文を踏まえたいうえで、それらの論文に改めて向きあつていただければ、さいわい、これに過ぎたることはない。